

名古屋大学高等教育研究センター主催
2007年度名古屋大学学生論文コンテスト

優秀賞

「ニート」批判を問い直す

—「自立・経済成長」イデオロギーの批判的検討を中心に—

文学部人文学科東洋史学専攻4年 石井 信伍

はじめに

カール・マルクス(Marx,Karl)の言葉は生を失っていない。現在、労働力は貨幣と交換され、貨幣と生が交換されている。つまり、働いてお金を得、お金によって生活している。お金がなければ生活できない。

しかし、人間が自らの利便のために生み出した貨幣が人間の生殺与奪を握るとするのは倒錯的ではないか。あたかも貨幣は人間の運命を握る神、ある種の「貨幣物神」¹になっている。また、フリーターや貨幣所有量の少ない人は、「負け組」などと侮辱的な呼び方をされている。まるで「貨幣物神」を崇拜しない異教徒として迫害されているかのようだ。そういった人たちでも安心して生きられるよう社会を変えればよいものを、フリーターにならないようになどという主張がなされている。持たざる者のありのままの生は肯定されないのか²。

労働力と貨幣の交換がもたらす事態も深刻である³。貨幣が重要である以上、同じような内容の行為でも、貨幣にならない行為が相対的に軽視されるからだ。たとえば、手品師が毎日手品をやっているが良いが、私が毎日働かずに手品をやっていると批判される。作家でない人は小説を書く楽しみから疎外される。学生はアルバイトに寄せられ学問から疎外されるという問題もある⁴。文化の創造は疎遠なものになっている。また、人の役に立つか、やりがいがあるかよりどれだけの貨幣と交換できるかで労働が選ばれる傾向を生む⁵。その結果、必要な労働が軽視され、労働のやりがいが減っていく⁶。

「ニート」⁷は、これらの非人間的な状況に対抗していると解釈できる。意図的でないにせよ貨幣と労働の交換を拒否し⁸、多くの貨幣を得ようとしていないからである。「ニート」は社会をよくするかもしれないのだ。

しかし、「ニート」は批判の対象となっている。たとえば林弘子は「ニート」の増加に関して「若者の職業能力の低下のみならず、国際競争力の低下、経済成長の制約（以下省略）」などを問題点としてあげている⁹。また、「自立」していないことが問題だという指摘もある¹⁰。さらに、そこに意欲の低下を見る論調もある。いわく、「学習意欲や就労・勤労意欲の低い青少年が増えつつあるのではないか」¹¹。さらに極端なものとしては、「ニート」は治安を悪化させるというものまである¹²。

私は、「ニート」が上記のような意義を持つならば、これらの批判は社会を良くすることを妨げていることになると思う。したがって本論文によってこれらの批判に反論し、人間的な社会の創造に貢献したい。そして、批判されがちな「ニート」に積極的な意義を与え、その生が保障される社会を構想する。

確かに労働をしないことに積極的な意味を見出す研究はある。たとえばジョルジュ・ソレル(Sorel ,Georges)は、ゼネラルストライキは社会を変えると主張した¹³。また、イタリアの「アウトノミア運動」は労働の拒否によって社会を変えようとした¹⁴。しかし、「ニート」の可能性を積極的に捉えた研究はほとんど見当たらない。本論文はその端緒となるだろう。

最後に、論文の構成を述べる。第 1 章では、「ニート」は自立していないという言説を批判する。第 2 章では、それに関連して、「ニート」は経済を衰退させるという説を批判する。第 3 章では、それらの議論を踏まえ、「ニート」が安心して生きていける社会の構想を示す。

第 1 章 『「ニート」は自立していないことが問題だ』という言説への反論

本章では、先述した「ニート」批判を取り上げ、それが正当なものでないことを論証する。とはいえ、すべての批判を取り上げることはできないので、ここでは代表的な「ニート」批判を検討するとどまる。

具体的な批判言説として「ニートは自立していないから問題である」というものを取り上げたい。それを取り上げたのは良く見かけられる批判であり¹⁵、働かない人を追い詰める言葉でもあるからだ。

ここで彼らが言う自立は経済的自立すなわち、(賃)¹⁶労働による貨幣獲得と生存のことであろう¹⁷。しかし、このような自立をある意味では押し付ける論調は、経済的自立の中に潜む依存を見逃しているという点で問題が多い。

端的にエーリッヒ・フロム(Erich Fromm)は「人の生活は彼に賃金もしくは給料を払う誰かに依存し存している」と述べている¹⁸。冷静に考えればその通りである。企業が労賃を払わなければ困るという点で確かに企業に依存している。マルクスの言葉を借りれば、「賃労働者である限り、彼の運命は資本に依存する」¹⁹。

さらに明確な根拠がある。それは自殺統計である。統計によると、自殺の多さと失業率は相関関係にあるという²⁰。すなわち、労働者もその雇用者に自らの命を預けるほどに依存しているといえる。失業によって生きられなくなるからである。

こういった経済的自立に潜む依存を見過ごすことは「労働の非人間化」につながる。たとえば賃金支払者・企業・資本などへの依存には、それらの命令に従わざるを得ないこと、自己裁量が減ること、などの問題点がある²¹。

さらに言うとも経済的自立に含まれる依存はこれにとどまらない。たとえば、経済的自立に向かいすぎるあまり家事労働を配偶者や外部の産業に依存するということもある。また、極端な人ならば労働にはいろいろな資源を使うという点で自然に依存しているのではないかというかもしれない。一見すると奇妙な主張だが、われわれが自然に依存して生きているという認識は環境保護上は注意すべき認識である。

これらの依存は、決して言葉遊びではなく重要な問題と関連している。たとえば資本への依存は搾取の問題に、家事を自分でしないという依存は家事能力の低下・家庭機能の外部化に、そして過度の自然への依存は環境破壊につながる。

このように考えると、経済的自立といえどもそれは一枚岩の自立ではなくむしろ依存の束であるよ

うにも見えてくる。経済的自立をしてはいけないというつもりはないが、無条件に経済的自立を旗に掲げることもできないだろう。

これに対し「ニート」批判者は、たとえ労働者が依存していることは認めるにしても「ニート」は何もしていない。したがって貨幣を得ているのは適切ではない、という反論をするかもしれない。しかし人間のなすいうこと・なすべきことは労働だけではない²²。考えること、批判すること、何かを作ること、遊ぶこと、景色を見ること、あるいは生きているということ²³、これらも十分に人間のなす価値のあること・なしていることである²⁴。つまり「ニート」は何もしていないという言葉自体が誤りである。よって「ニート」は何もしていないという言説自体が成り立たない²⁵。

以上の議論から、経済的自立だけを自立とみなすことが必ずしも適切ではないこと、経済的自立は無条件に称揚可能なものではないこと、労働者にも依存があることなどが見えてきた。

このように、「ニート」を自立していないと批判することは必ずしも妥当とはいえない。

第2章 「ニート」は経済を衰退させるという意見への反論

前章では、「自立」、すなわち労働によって貨幣を得なければならないというイデオロギーを批判した。そして、そのイデオロギーは、労働によってもたらされる経済成長と不可分のものである。したがって、経済成長イデオロギーも批判されねばならない。

具体的には、「ニート」は経済を衰退させるから問題であるという言説を批判する。ところで、経済が衰退しているというのはどれほど悪い状態なのだろうか。このようなことを言うと、経済が発展していなかった昔は悲惨だったという意見があるだろう。以下では、その意見に従って昔を見る。たとえば、産業革命以前の時代を見てみよう。そのころならば今ほど経済の成長は見られなかったはずである。

フリードリヒ・エンゲルス(Engels, Friedrich)は以下のように説明する。

労働者はきわめて快適な生活を日々たんとすごし、信心深くまじめに、実直でのんびりした生活を送っていた。(・・・中略・・・) 彼らは過重労働の必要がなかったし、気が向かなければ働かなかった²⁶。

今であつたら「ニート」と批判されるかもしれない²⁷。しかし快適な日々を送っていたという。これは産業革命以前の社会であるから、現在の日本ほどの経済成長を遂げてはいなかったはずである²⁸。

また、19世紀にタイを訪れたアンリ・ムオ(Mouhot, Henri)はシャム人は大人から子供まで一日中戦争将棋・カードゲーム、凧揚げなどをして遊んでいる、と報告している²⁹。経済の成長が文化的なものを生むというのは必ずしも真ではないのである。また16-17世紀を生きたコメニウス

(Comenius, Johann, Amos) も、絵入り教科書である『世界図絵』のなかで、産業革命以前のヨーロッパにおける文化的豊かさを示している。かれによると、そのころから奇術³⁰、園芸、球技、すごろく、竹馬などの遊びが行われていたという³¹。

このように、経済が低位の状態にあるからといって、人々の生活・文化が悲惨なものになるとは必ずしもいえない³²。

こう述べると、かつては強制労働や奴隷制など悲惨なことがあったのではないかという批判があろう。だがそれらは、経済が発展していなかったことが原因だろうか。そうではなく、基本的人権や自由・平等といった近代の諸理念が発見されていなかったことが原因だろう。経済があまり成長していない状況下で人々が楽しんでいたとはいえ、経済発展がみられないせいで歴史的な悲劇が起こったとは必ずしもいえない。だが、たとえば中世ヨーロッパには貧しい人が多かったのではないかという批判がある。その批判には、「ニート」は社会保障を破綻させるという意見と同時に反論しよう。

確かに中世ヨーロッパにも貧しい人はいた。しかし、その人々の多くが社会保障によって救われていた面があったということは認識されているだろうか。実際に、修道院・救貧院によって貧しい人々の救済が行われていたという³³。特に災害が起こったときには、富める人による喜捨、教会による食糧配給などが行われていたという³⁴。

どうしてこのような体制ができたのか。その背景にはキリスト教思想があると考えられる。聖書に以下のようにある。「出発して、あなたの持っているものはすべて売り、そして貧しい人に与えなさい。そうすれば天において宝を持つことになる」³⁵。これは、社会保障を思想の面で支えているといえる。ブロンスワフ・ゲレメク(Geremek, Bronislaw)は、中世において慈善が宗教的救済を得る手段、よきキリスト者であることを示す手段として機能していたことを指摘している³⁶。

このような例はもちろんキリスト教社会特有のものではない。イスラーム世界においても、宗教的義務として喜捨(ザカート)があることは良く知られている。

以上の議論が示すことは、社会保障は経済成長のみによって充実するのではなく、それを支える人々の心性・思想によっても充実するということだ³⁷。また、制度上の問題もある。すなわち、経済停滞によって福祉政策が破綻するとは必ずしもいえない。もし疑うのであれば、自分が募金箱に1円玉を入れることを拒否したときに、それがなぜなのかを考えればよい。また、拒否しないならばそれはなぜかということも考えればよい。おそらくどちらの場合にも、経済から離れた理由が見出されるであろう。経済力の低い場所でも社会保障が成立することは十分に可能なのである。まだ疑うのであれば、「未開社会」ではきわめて平等な分配が行われているということを思い起こす必要がある³⁸。

さらに、経済成長を目指すことが社会保障を崩している面もある。たとえば、経済成長のくびきになるからといって、福祉目的でさえも大企業にかかる税金を十分に増やそうとしない点によく現れている。経済大国といわれる国でも、給食費未払い、年金未納、生活保護打ち切り、餓死といった社会保障にかかわる問題が山積していることも見逃してはいけない。

また、経済成長を目指すイデオロギーがかえって貧困を生み出すことも良く知られているだろう。経済成長のためには企業による労賃の引き下げ（あるいは非正規雇用者の積極的な利用）・国家による社会保障の引き締め・すべてのものに値段が付くため、貧しい人がかえって困る³⁹、などの事態が発生するからである。

以上の議論により、経済成長によって福祉が充実するとは限らないことが示唆された。

では、「開発途上国」を見よ、という反論にはどう答えたらよいであろうか。確かに、「発途上国」では国の経済的貧しさのゆえに個人も貧しさの害を受けなければいけないという面がある。したがって、どこまでも経済衰退をもたらしても良い、とまで主張するといひすぎになろう。ちょうど、資源の制約や環境問題との関連上経済成長をどこまでも行えるというのが言いすぎであることと同じである。そもそも、「ニート問題」による経済の衰退がそれほどのものになるかも疑問ではあるが。

さらに、「開発途上国」は常に悲惨であるというのは思い込みに近い面がある。たとえば、「途上国」にしばしば出向くティエリ・ヴェルヘルスト(Verhelst, Thierry)は「途上国」に生きる人は「バイタリティーにあふれ、生きることを楽し」んでいると証言する⁴⁰。また、「途上国」のことを考えろというのであればむしろ、「途上国」資源の搾取に依存する日本の経済成長や、「ひも付き援助」を主に行うあり方がむしろ批判されるべきであろう。

最後に、経済成長とそれを志向することが持つ問題点をも簡単に指摘しておこう。1つ目は公害・環境問題である。たとえば、現段階で経済成長を目指すとすれば多くのものを売らなければならない。その結果、多くのものが作られ捨てられる。すると、ごみ問題、生産過程で化石燃料を消費することによる地球温暖化、エネルギーの枯渇などの問題が起こりうる。

また、私が指摘するまでもなく経済成長のもたらした「豊かさ」によって人々が生き辛くなったという問題点がある⁴¹。さらに、経済成長に必要な労働にも問題が多いことは「はじめに」で述べた。経済成長がかえって貧困につながる可能性も指摘した。

このように、経済成長は絶対の目標でないばかりか、有害な面がある。したがって経済成長を抑制する「ニート」は批判されないどころか、賞賛されたとしてもあながち不当ではないことが明らかになった⁴²。

第3章 これからに向けての若干の提言

前章までの議論により「ニート」批判の不当性を示してきた。しかし、もしほとんど賃金労働によってしか生きられない状況があるならば結局「ニート」は批判されるべきではないが生存できないということになってしまう。それでは不十分である。したがって本章においては賃金労働を憲法 25 条の前提としないような社会を目指すにはどうするかを考える。

1つめは、もうすでに一部見られるようだが⁴³、「市民美術館」「市民図書館」などの設置である。「市民美術館」には、原則として誰のどのような作品も展示される⁴⁴。たとえば私が画用紙に何らかの絵を描いて持っていくと、すぐに展示される。入場料は無料である。この制度によって、誰もが文化の創造者、享受者になることができる。「市民図書館」には、文筆労働者ではない人々の書いたものを作品として配架する。また、道路でのストリート・パフォーマンスの解禁もいいアイデアである⁴⁵。それを劇場やコンサート・ホールにまで拡大するのも悪くないだろう⁴⁶。これらの方法により、労働をしないためにお金のない人でも文化の創造に携わり、また、文化を味わうことができる。文化・芸術を一般の人々の手に取り戻すという意味で革命的である⁴⁷。

2つめとして、公営の「日用品貸し出し所」の設置をあげたい。この場所には、寄付や資源回収で集めた衣類・食器・テレビなどが置かれる。人々は、図書館で本を借りるように、たとえば1ヶ月間いくつかの日用品を借りることができる。状況によっては延長貸し出しも認められる。この制度によって無償で日用品が調達できる。環境保護にも有益である。このような再利用は、現在行われているリサイクルよりエネルギー消費が少ないと思われることにも注目して欲しい。

最後に政府は、前述・後述の提言が実施できるよう法改正と法整備を進めなければならない。

次にある種の企業に対しては食糧配給制度を提案する。コンビニなど⁴⁸は食料を廃棄しているが、その食糧を廃棄ではなく配給に回すという方法である⁴⁹。実施の主体は、その店である。店先で配給を行ってもいいが、各戸を回って配給するという方法も考えられる。コンビニには夜間営業による電力消費・やや不健康な食品などの問題があるから、配給制度を「社会的責任」として行わせても不当ではない。また、豊作になりすぎた場合には農家もこの制度の実施主体になることができよう。もちろん、十分な財産を持たない人に優先して配給されねばならない。配給を与えられることに引け目を感じることはない。コンビニや農家などの社会貢献を助けているのだから。そして、愛を与える・夢を与える・希望を与えるという語法が愛を売る・夢を売る等々と比べて少しでも人間的に見えるならばわれわれは、売買よりも与えあいのほうが人間的であると無意識にせよ思っているのではあるまいか⁵⁰。ともかく、この制度によって食糧不足による死は免れることができる。

同じように、余分に生産された食料以外のものや過剰在庫なども社会的責任として配給しなければならない。この策は、環境保護上も行う意義が十分にあるということも忘れてはならない。

最後に、われわれが行うべきことを提案する。1つめは助け合いの復活である。飢えた人には食料を、家のない人には一晩の宿を与えるなどの助け合いの精神が求められる。1日の食事や一晩の宿を与えることができないほどゆとりのない人ばかりではないはずである。フロムは言う。「与えることはそれ自体が無上の喜びだ」⁵¹。

2つめは、自ら生産や贈与を行うことである⁵²。たとえば、自然の中で食糧を採取すること、ちょっとした修理・工作を自分で行うことなどが求められる。そして、お互いに物を修理しあったり、食糧の与え合いなどを積極的に行ったりする必要がある。

確かにこれらの提言は実行が難しいように見える。しかし、食料やさまざまな日用品を再利用(従来のリサイクルではなく私の述べたような方法で)せずに捨てる文明が永続するのも同様に難しいように思われる。ほぼ同様の理由により、労働しすぎることも可能とも好ましいともいえない。労働から解放される人や賃金労働とは違った形で生きる人がいる社会も考える必要がある。

おわりに

本論は「自立・経済成長」イデオロギーの虚偽性を暴露し、環境問題やマルクスの提示した問題の解決につながるという「ニート」の積極的意義を明らかにした。そして、労働・貨幣・生の交換が緩和され、「ニート」生存の保障された社会への一歩が示された。

しかしまだ問題点が多い。歴史叙述は証拠不足かもしれない。「生」は保障されても「十分な生」が保証されていないという批判は甘受するしかない。ただし、生がなければよく生きることもあらゆる闘争も存在し得ない。これらは今後の課題とする。

それでも、「ニート」批判の虚偽性や、「ニート」の持つ意義も少しは証明できただろう。更なる議論の深まりがあれば幸いである。

謝辞

「ニート」についていろいろな方向から考えるきっかけを与えてくれた、カール・マルクス、エーリッヒ・フロムをはじめとする参考文献の著者、そして翻訳者の方々に感謝を捧げる。あなたたちにめぐり合えたことは私にとって大きな幸せである。私は彼らのためにクレドを表明する。生は賃労働と貨幣に優越する。

注

- ¹ マルクスの語法とは違うが、私はこのように表現することはできると考える。人の生死を自由に掌握できるものは、(もしいるならば)神以外には考えがたいからである。マルクスが用いた「貨幣物神」については、カール・マルクス(マルクス=エンゲルス全集刊行委員会)『資本論 I』大月書店、1961、165頁を参照のこと。なお、『ドイツ・イデオロギー』(マルクス、エンゲルス [真下信一 訳] 『ドイツ・イデオロギー』大月書店、1965、[国民文庫 6]、63-66頁。)の「人間自身の仕業が人間に対立する」という言い方にのっとれば、貨幣による「疎外」ともいえる。
- ² この考えは格差を固定するのではないかという鋭い批判があろう。しかし、格差を問う背後にある「多く持つほうがいい」という考えはブルジョワ社会のイデオロギーと制度の産物に過ぎない。もし、(私が提言するように)持たない人でも健康的で文化的な生活ができるようになれば、ブルジョアの虚偽意識は解消される。多く持つことがそれほどの意味をなさなくなるからだ。
- ³ もちろん、労働の喜びがなくなり、生産物が他人のものになってしまう「疎外された労働」も問題である。カール・マルクス(城塚登 他訳)『経済学・哲学草稿』岩波書店、1964、82-101頁、(岩波文庫白 124-2)。
- ⁴ 私の意見では「社会勉強」は、社会の抱える問題点を発見し、それを改善する道を探す営みでなければならない。

もちろん、そのために何か実践をなすならばそれは良いことであろう。社会が疎外に満ちている場合、社会への適応ではなく社会の変革を目指すことが「社会勉強」の役割であると思う。

- 5 たとえば、フリーターの存在はきわめて社会に貢献しているのに、貨幣獲得量が少ないからという理由で「フリーターになるな」と主張するという倒錯が起こっている。本来ならフリーターでも安心して暮らせる社会を目指すのが本筋ではないのか。そうでなければ多い所有を可能とする職業を選択せざるを得なくなり、職業選択の自由と抵触するメカニズムを導入することになってしまう。また、賃労働によってしか生存を確保できないということにまでなればそれは強制労働であるというほかは無い。（「改宗するか殺されるか」という選択を迫られたとき、例え改宗を選んだとしてもそれが自由意志に基づいているとは考えづらいことと全く同様である。自由な、強制でない選択というならばどの選択肢を選んでも死ぬということがあってはならないであろう）。
- 6 食料は大切であるにもかかわらず農業が衰退している。福祉はこれから重要になるのに福祉職に就く人の不足を嘆いている (http://www.yomiuri.co.jp/iryuu/news/kaigo_news/20060918ik02.htm,「読売オンライン」3月3日引用)。仕事上の理由でうつ病にかかる人も増えている。さらに、労働からやりがいや他者への貢献、自己表現・実現などを捨象するならばそれも疎外された労働（特に類的存在からの）の一形態となる。ただし現在では、やりがいのある労働へ向かう傾向のようなものがあるらしい。谷内篤博『大学生の職業意識とキャリア教育』勁草書房、2005、36頁。
- 7 本論では、教育を受けていないという側面は切り離し、労働をしていないという側面に限定して用いる。そして「ニート」にいたった動機等ではなく、それに向けられた批判言説や社会への影響といった観点から論じる。
- 8 確かに「ニート」も必要とされる労働を行っていないといえるかもしれない。しかし、本文で記したような状況を変えるには、労働・貨幣・生の交換関係を切断しなければならない。（私が労働と貨幣の交換を批判していることは、不払い労働を薦めているという意味では全くない。貨幣にならない行為を大切にしようという意味である。）。貨幣を用いずとも生きられるならば、喜びや必要度・やりがいによって労働を選択できるようになるという意味である。そして、貨幣にならない行為が大切にされるようになる。このような状況を作るときに「ニート」が意味を持っているのである。
- 9 林弘子「コラム11 増えるフリーターとニート」山崎好裕、前掲書、185頁。
- 10 小杉礼子『フリーターとニート』勁草書房、2005、1頁。
- 11 中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」（答申）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/07020115/001.htm(11月22日現在)
- 12 工藤啓、『「ニート」支援マニュアル』PHP研究所、2005、50頁。
- 13 ジョルジュ・ソレル（今村 仁司 他訳）『暴力論 上』、岩波書店、2007（岩波文庫白138-1）。
- 14 白石嘉治（他）編『ネオリベ現代生活批判序説』新評論、2005、90頁。
- 15 たとえば若者「自立」塾といったものに典型的である。
- 16 「ニート」を論ずる人は正社員・非正規雇用・「ニート」等のように自営業や第一次産業のような賃労働でない労働を捨象する傾向にある。
- 17 たとえば自立には経済的なもの以外に精神的なものや身体的なものもあるだろう。しかし「ニート」の定義から考えて、「ニート」が経済的自立以外の点で自立しているかどうかはケースバイケースとしかいえない。たとえば、定義の範囲に入る年齢であって「アウトノミア運動」（注14）のために労働を拒絶することを自己決定した場合精神的にはかなり自立しているように思われる。社会を変えるためになされる、損をも省みない行為は、自立した精神からのみ生まれる実存的な決断のように思われるからだ。
ちなみに、自立＝経済的自立をほのめかす考え方として「自立して、自己の収入だけで生きていける」という用語法がある。橋木俊詔『脱フリーター社会』東洋経済新報社、2004、21頁。
- 18 Fromm, Erich, *Sane Society*, Routledge: London, 1963, p. 112.
- 19 カール・マルクス（長谷部文雄 訳）『賃労働と資本』岩波文庫、1935、岩波文庫白124-6）、64頁。

-
- 20 本橋豊 編著『自殺対策ハンドブック Q&A』ぎょうせい、2007、6-7 頁。
- 21 たとえば、食品偽装などは好んでやったのではなく命令されてのことだろう。もし逆らえば自分のみが危ないかもしれないという相手に「従属」した状況が想起される。ちなみに、自ら資本の一形態である生産手段をもつ自営業（資本に依存するというより資本を所有し使用する）などの場合、販売する商品・労働日、時間・客とのやり取り・店の装いなど自己決定できる部分が多いように思われる。
- 22 このような論点については、フランクルの書物（フランクル V.E.（山田邦男他訳）『それでも人生にイエスという』春秋社、1993、33-38 頁。 ）に教えられるところが多かった。
- 23 このことは「ニート」批判者も前提としているはずである。そうでなければわざわざ「ニート」におせっかいを焼いたりせずには無視するであろう。
- 24 これらを貨幣に還元せよというのではない。ただそういった人間の営みを「何もしていない」と切り捨てることはできないといたいのである。
- 25 これは言葉遊びではなく人間観の問題である。人間のすることを労働だけと捉えるなら、それは人間を労働専用ロボットとみなす考えである。人間機械論者や自由意志の否定者でも人間を労働機械とみなしはしないだろう。（もっとも自由意志を否定すると「ニート」は批判の対象にはなりようがなくなる）。
- 26 フリードリヒ・エンゲルス（杉山忠平 他訳）『イギリスにおける労働者階級の状態（上）』岩波書店、1990、（岩波文庫白 129-0）、28 頁。
- 27 働かない人は昔から存在していたのである。むしろ重要なことは現在「ニート」と名指しされることで、かつてのプロレタリアのように、それが社会を動かす力であると認識されやすくなることだろう。
- 28 マックス・ウエーバーも産業革命以前の牧歌的生活について証言している。マックス・ウエーバー（大塚久雄 訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1989、（岩波文庫白 209-3）、74-77 頁。さらに日本その他アジアにおいても同じような例が見られる。井上章一他編『日本人の労働と遊び・歴史と現状』国際日本文化研究センター、1998、92-94 ページ。
- 29 アンリ・ムオ（大岩誠 訳）『インドシナ王国遍歴記』中央公論新社、2002、42 頁。さらにムオは、このような例はほかのところにも見られると述べている。
- 30 古い時代の奇術を知るには Scot, Reginald, *Discoverie of Witchcraft*, Dover, 1989 を見るのが良い。硬貨の消失などの奇術を紹介している。
- 31 コメニウス（井ノ口淳三 訳）『世界図絵』平凡社、1995、（平凡社ライブラリー 129）、290-303 頁。
- 32 エーリッヒ・フロムは原始時代においてさえも豊かな文化があったことを示している。エーリッヒ・フロム（小此木啓吾 監訳）『よりよく生きるということ』第三文明社、2000、202-203 頁。同様に、「未開社会」の豊かさについては、ジョン・セイモア 他（大島淳子 他訳）『遙かなる楽園』日本放送出版協会、1988。を参照のこと。
- 33 堀越宏一(他)編『中世ヨーロッパを生きる』東京大学出版会、2004、93 頁。
- 34 堀越宏一(他)編、前掲書、93-95 頁。
- 35 『新約聖書』マルコ・10・21。（英語版より筆者訳による）。
- 36 プロニスワフ・ゲレメク（早坂真理 訳）『憐れみと縛り首』平凡社、1993、31 頁。
- 37 もちろん、これらの慈善・相互扶助は現代の福祉国家とは異なる。しかし福祉国家の危機が叫ばれる現在、このような相互扶助体制は見直されるべきではないだろうか。このような議論は、朴光駿『社会福祉の思想と歴史』ミネルヴァ書房、2004、297-298 頁。
- 38 吉田禎吾『未開民族を探る』社会思想社、1965、（現代教養文庫 520）、33-34 頁。
- 39 経済成長のためには、貨幣のやり取りが大きいほうが良い。したがって多くのものは商品となる。すると住居や食品にも値段が当然のようにつき、貨幣をもたないものはそれを得ることができないという構図になる。
- 40 ティエリ・ヴェルヘルスト（片岡幸彦 訳）『文化・開発・NGO』新評論、1994、106 頁。

-
- 4¹ このようなことを指摘する文献は数多い。たとえば、小柳晴生は、豊かさが多くの選択肢を生み出したため生きにくくなったと説明する。小柳晴生『ひきこもる小さな哲学者たちへ』NHK出版、2002、(生活人新書 017)、21－25 頁。
- 4² 私は、このような論証がなくても「ニート」の生は無条件に肯定されるべきだと考えている。しかし批判者の間違っただイデオロギーに基づく批判は退けられなくてはならない(そもそも彼らの思想は労働と労働がもたらす貨幣による大量消費が環境を壊すことに無自覚すぎる)。したがって本論文ではやや不本意だがこのような論証を行った。
- 4³ 地下鉄丸の内駅で行われている展示にヒントを得た。
- 4⁴ 技術的な巧拙は問わないが、誹謗中傷のような作品は避ける。なお、この制度には盗難対策や購入のために費用がかからないため比較的安価になる。
- 4⁵ 道路はそもそも自動車ではなく、人々の場所であるという指摘がある。杉田聡『クルマを捨てて歩く！』講談社、2001、(講談社α新書) 176－178 頁。
- 4⁶ 夜には、家を失った人々がここで寝泊りすることができる。
- 4⁷ ウィリアム・モリス (中橋一夫訳)『民衆の芸術』岩波書店、1953、(岩波文庫白 201－2)。
- 4⁸ レストランや学校給食などを含んでも良い。
- 4⁹ 「腐らしたり、壊したりするために神によって作られたものは一つもない」ジョン・ロック(鶴飼信成 訳)『市民政府論』岩波文庫、1968、36 頁。
- 5⁰ そのほか、バレンタインデーのチョコなどを想起せよ。
- 5¹ Fromm, Erich, *The Art of Loving*. New York, 1956, p. 25.
- 5² アルビン・トフラー (Toffler, Alvin)の、生産を行う消費者「プロシューマー」を参考にした。アルビン・トフラー (徳岡孝夫 訳)『第三の波』中央公論社、1982、(中公文庫)、360－362 頁。

参考文献

(人名についてはその書籍の表記に従った)

- ・ アルド・レオポルド (新島義昭 訳)『野生のうたが聞こえる』講談社、1997、(講談社学術文庫 1301)。
- ・ アルビン・トフラー (徳岡孝夫 訳)『第三の波』中央公論社、1982、(中公文庫)。
- ・ アントニオ・ネグリ他 (杉村昌昭 訳)『自由の新たな空間』世界書院、2007。
- ・ アンリ・ムオ(大岩誠 訳)『インドシナ王国遍歴記』中央公論新社、2002
- ・ 飯田経夫『経済学の終わり』PHP 研究所、1997、(PHP 新書 033)。
- ・ 井上章一他編『日本人の労働と遊び・歴史と現状』国際日本文化研究センター、1998。
- ・ ウィリアム・モリス (中橋一夫訳)『民衆の芸術』岩波書店、1953、(岩波文庫白 201－2)。
- ・ 内山節 『貨幣の思想史』新潮社、1997、(新潮選書)。
- ・ エドワード・リウス (小阪修平 訳)『マルクス FOR BEGINNERS』現代書館、1980、(FOR BEGINNERS シリーズ③)。
- ・ エーリッヒ・フロム (加藤正明 他訳)『正気の社会』社会思想社、1958。
- ・ エーリッヒ・フロム (阪本健二 他訳)『疑惑と行動』東京創元社、1965、(現代社会科学叢書)。
- ・ エーリッヒ・フロム (石川康子 他訳)『マルクスの間観』合同出版、1970。
- ・ エーリッヒ・フロム (岡部慶三 訳)『精神分析の危機』東京創元社、1973、(現代社会科学叢書)。
- ・ エーリッヒ・フロム (小此木啓吾 監訳)『よりよく生きるということ』第三文明社、2000。

-
- ・ エルンスト・シューベルト (藤代幸一 訳)『名もなき中世人の日常』八坂書房、2005、(中世ヨーロッパ万華鏡 3)。
 - ・ カール・マルクス (長谷部文雄 訳)『賃労働と資本』岩波文庫、1935 (岩波文庫白 124-6)。
 - ・ カール・マルクス (マルクス=エンゲルス全集刊行委員会 訳)『資本論 I』大月書店、1961。
 - ・ カール・マルクス (城塚登 他訳)『経済学・哲学草稿』岩波書店、1964、(岩波文庫白 124-2)。
 - ・ マルクス 他 (真下信一 訳)『ドイツ・イデオロギー』大月書店、1965、(国民文庫 6)。
 - ・ ガルブレイス, J. K. (都留重人 訳)『経済学の歴史』ダイヤモンド社、1988。
 - ・ クチンスキー, J. (良知力 訳)『労働者階級の成立』平凡社、1970。
 - ・ 工藤啓 『「ニート」支援マニュアル』PHP 研究所、2005。
 - ・ 玄田有史 他『子供がニートになったなら』NHK 出版、2005 (NHK 新書 152)。
 - ・ 幸徳秋水『評論と随想』自由評論社、1949。
 - ・ 小杉礼子 『フリーターとニート』勁草書房、2005。
 - ・ コメニウス (井ノ口淳三 訳)『世界図絵』平凡社、1995、(平凡社ライブラリー 129)。
 - ・ 小柳晴生『ひきこもる小さな哲学者たちへ』NHK 出版、2002、(生活人新書 017)。
 - ・ 斎藤環『「負けた」教の信者たち』中央公論新社、2005。
 - ・ シュマッハー, E. F. (斎藤志郎 訳)『人間復興の経済』佑学社、1976。
 - ・ ジョルジュ・ソレル (今村 仁司 他訳)『暴力論 上』岩波書店、2007。
 - ・ ジョン・セイモア 他 (大島淳子 他訳)『遙かなる楽園』日本放送出版協会、1988。
 - ・ ジョン・ロック(鵜飼信成 訳)『市民政府論』岩波文庫、1968
 - ・ 白石嘉治 (他) 編『ネオリベ現代生活批判序説』新評論、2005。
 - ・ 杉田聡『クルマを捨てて歩く!』講談社、2001、(講談社α新書)。
 - ・ ダヴィッド・スミス (小坂修平 訳)『資本論 FOR BEGINNERS』現代書館、1983、(FOR BEGINNERS シリーズ⑩)。
 - ・ 高島進『社会福祉の歴史』ミネルヴァ書房、1995。
 - ・ 橋木俊詔『脱フリーター社会』東洋経済新報社、2004。
 - ・ 谷口隆之助『疎外からの自由』誠信書房、1962。
 - ・ 谷内篤博『大学生の職業意識とキャリア教育』勁草書房、2005。
 - ・ 丹下博文 『環境基礎読本』財務省印刷局、2003。
 - ・ 辻信一 他『抱きしめて、スローラブ』集英社、2006。
 - ・ 辻信一 『スロー・イズ・ビューティフル』平凡社、2004、(平凡社ライブラリー501)。
 - ・ 植田勲『地球をこわさない生き方の本』岩波書店、1990 (岩波ジュニア新書 179)。
 - ・ ティエリ・ヴェルヘルスト (片岡幸彦 訳)『文化・開発・NGO』新評論、1994。
 - ・ ドミニク・メーダ (若森章孝 他訳)『労働社会の終焉』法政大学出版局、2000。
 - ・ 野田正彰『この社会の歪みについて』ユビキタ・スタジオ、2005。

-
- ・ パオロ・マツァリーノ『反社会学講座』筑摩書房、2007、(ちくま文庫)。
 - ・ 八田昭道『ごみから地球を考える』岩波書店、1991、(岩波ジュニア新書 192)。
 - ・ 二神能基 『希望のニート』東洋経済新報社、2005。
 - ・ フランクル, V. E. (山田邦男 他訳) 『それでも人生にイエスという』春秋社、1993。
 - ・ フランソワ・イシ (蔵持不三也 他訳) 『絵解き中世のヨーロッパ』原書房、2003。
 - ・ フリードリヒ・エンゲルス (杉山忠平 他訳) 『イギリスにおける労働者階級の状態 (上)』岩波書店、1990、(岩波文庫白 129-0)。
 - ・ プロニスワフ・グレメク (早坂真理 訳) 『憐れみと縛り首』平凡社、1993。
 - ・ 朴光駿『社会福祉の思想と歴史』ミネルヴァ書房、2004。
 - ・ ホートン, W. M. (森井真 訳) 『キリスト教は文明を救うるか』中央公論社、1992、(中公文庫)。
 - ・ 堀越宏一 (他) 編『中世ヨーロッパを生きる』東京大学出版会、2004。
 - ・ ポール・ラファルグ (田淵信也 訳) 『怠ける権利』人文書院、1972。
 - ・ 本田由紀 他『ニートって言うな!』光文社、2006、(光文社新書 237)。
 - ・ マックス・ウエーバー (大塚久雄 訳) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1989、(岩波文庫白 209-3)。
 - ・ マルクーゼ (良知力 他訳) 『〔改訂版〕初期マルクス研究』未来社、1968。
 - ・ マルクーゼ, H. (生松敬三 他訳) 『一次元的人間』河出書房新社、1980、(現代思想選 5)。
 - ・ モーゼス・ヘス (山中隆次 他訳) 『初期社会主義論集』未来社、1970。
 - ・ 山崎好裕編著『キャリア・プランニング』中央経済社、2006。
 - ・ 吉田禎吾『未開民族を探る』社会思想社、1965、(現代教養文庫 520)。
 - ・ 吉田久一 他『社会福祉思想史入門』勁草書房、2000。
 - ・ ルフェーブル, H. (中村雄二郎 訳) 「日常生活批判」、竹内良知 編『疎外される人間』平凡社、1968、(現代人の思想 9)、132-175 頁。

洋書、著者未詳のもの、ウェブサイトなど

- ・ Christopher, Milbourne. *Magic A Picture History*, Dover: New York, 1991.
- ・ Fromm, Erich. *The Art of Loving*, New York, 1956.
- ・ Fromm, Erich. *The Sane Society*, Routledge: London, 1963.
- ・ Scot, Reginald. *Discoverie of Witchcraft*, Dover: New York, 1989.
- ・ Tormey, Simon, *Anti-Capitalism A Beginner's Guide*, Oxford, 2004.
- ・ Wall, Derek. *Babylon and Beyond*, London, 2005.
- ・ 『新約聖書』日本国際ギデオン教会、2006。
- ・ 中央教育審議会答申 「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」(答申)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/07020115/001.htm(11月22日現在)。

- 「読売オンライン」 http://www.yomiuri.co.jp/iryuu/news/kaigo_news/20060918ik02.htm (2008年3月3日現在)。